

南モンゴルにおける人口流動と家畜流動

— シリングル盟の事例

尾 崎 孝 宏

1. はじめに

本論は、基本的には既発表の拙論「牧地の分割と定住化—南モンゴル，シリングル盟の事例」（尾崎 2000a）の続編として位置付けられる。本論のデータは、1999年9月末～10月初頭にかけてシリングル盟で行われた現地調査で得られたものであるが⁽¹⁾，その調査目標および着目点は、前掲論文の根拠となるデータを収集した1999年3月の現地調査とその考察結果に立脚したものである。

簡潔に説明すると、現在、南モンゴルの牧畜地域に特徴的な景観として、有刺鉄線により囲い込まれた牧地が挙げられる。これは、中国が全国規模で行っている「生産責任制」の牧畜地域版として実行された、各経営体（一般的には世帯）に対する家畜・牧地分割への対応であると考えられるのだが、これと同時に並行的に、牧民の移動性の低下および住環境のゲルから固定家屋へのシフトも発生している。こうした一連の現象の実情について、1999年3月の現地調査で具体的な事例データを収集し、それに基づいて考察したのが前掲論文である。

そして、前掲論文で今後の課題として列挙したのが、サンプル数の増加および地方的バリエーションの確認、家畜の売却を通じた収入・流通の現状に対する調査、エスニシティの問題などであった。そのため、今回の調査は基本的にこの点を主たる着眼点として行われており、それは家畜売却期である秋季の調査であることや、シリンホト市アラシャンボラグ＝ソムや東スニト旗チャントシル＝ソムといった新たな調査地点に反映されている。なお、後述するように、エスニシティの問題についても若干のデータを得ることが結果として可能では

あった。しかし、この点を調査のテーマに据えることは「敏感な問題」であるがゆえに調査上の困難が予想されたため、意図的に調査テーマとしては取り上げなかった。そのため、本論でもこの点は考察の対象としていない。

一方、今回の現地調査の結果として認識を深めることとなった論点の一つが、本論のテーマとして挙げている人口と家畜の流動である。これは、牧地の囲い込みや定住化に伴ういわゆる「遊牧」、つまり移動的牧畜という伝統的生業を念頭に置いた上での移動性低下とは別の側面における移動を射程に入れた概念である。より本論の調査データに即して述べるなら、人の移住と家畜の越境放牧および地域外搬出ということになる。

また、これとは別に、今回の調査では牧地に関連して、現地のインフォーマントから牧地の荒廃に関するコメントが述べられたことが印象的であった⁽²⁾。これらの点については、1990年代前半～半ばにかけての現地調査に基づき、移動性の低下と草原の劣化の関連に言及したハンフリーとスニースの研究(Humphery & Sneath 1999)を参照しつつ、本論の考察部分で検討することにした。

◆ 参考地図



1: チャントシル=ソム
2: バヤンボルド=ソム
3: デルゲルハン=ソム

4: ツアガンノール=ソム
5: シリンホト市
6: アラシャンボラグ=ソム

2. 調査データ

A. 事例1

調査地点：西ウジュムチン旗ジャラン＝ソム，ザガスタイ＝ガチャ。1999年春の調査における事例3，J氏のホト（尾崎 2000a：56-59）

牧畜に関する追加情報：

1983年の牧地分配は，1人1800ムーだった⁽³⁾。父の世帯が4人，J氏の世帯が2人だったので，合計6人分，つまり， $1800 \times 6 = 10800$ ムーを分配された。現在に至るまで，父の土地とは区別せずに使用している。

1999年春からの家畜頭数の変遷は，600頭（調査当時）～900頭（出産後）～700頭（売却後）。なお，売却対象となるのは，主に仔ヒツジ（ホルガ），オス，老畜。なお，種オスも個人所有である。このホトには種ヒツジ13頭，種ヤギ2頭を擁する。

このホトの草刈場は，父のホトとの間にある丘の斜面。トラクターの後ろに草刈機を取りつけ，自分で刈り取るとのこと。調査当時，数列の草刈跡が見受けられた。なお，草刈に限らず水汲みもトラクターを利用し，移動は自家所有のバイクや自動車を用いるため，現地では今日，ウマで移動する者はいないという。J氏自身，隣のホトまでの移動手段としてバイクを利用していた。

このホトでの傭人の報酬は，毎月200元と仔ヒツジ一頭である。

ジャラン＝ソムには4つのガチャが存在する。ザガスタイ＝ガチャは人民公社時代の名残で現在なお「2隊」と漢語で言及されることが多い。これは，モンゴル語の会話の中でも，「アルトゥイ」と漢語のまま用いられている。なお，街道近くの「3隊（ドウルブルジン＝ガチャ）」には漢族の牧民も多く，「4隊」に至っては漢族ばかりであるとのことであった。漢族は，元々は農業を行いに来ていたそうだが，今では皆，牧民となっている。彼らは，J氏が物心ついた頃から，つまり文化大革命の前から住んでいるらしく，改革開放以降の新来ではない，とのことであった。

B. 事例2

調査地点：シリンホト市アラシャンボラグ＝ソム，セルゲレン＝ガチャ（シリンホト市の中心部より北へ65km）

ホトの建物構成：固定家屋，ゲル×2，家畜囲い

ホトの世帯数：2

世帯1の構成：U氏（46歳），妻（42歳），娘（22歳），息子（19歳）

世帯2の構成：傭人，傭人の妻，傭人の子供3人

牧地の分配，住居：

1983年に家畜を分けた。ガチャから1人あたり何頭，という要領で分配され，U氏は世帯で100頭の小家畜（ヒツジ・ヤギ）をもらった。

1991年に牧地を分けた。土地も1人あた約2900ムーという分け方で，この世帯は14490ムーの土地を得た。土地は二塊に分かれており，冬営地はここから10kmほど南の山中。つまり，調査地点は春～秋の営地で，ここには南側に井戸がある⁽⁴⁾。冬営地にも石造りの家畜囲いがあり，11月から春節までを過ごす。水は雪から得る。ただし放牧は傭人が担当し，U氏は固定家屋から日帰りで放牧地まで通い，群れをチェックしているという。冬営地への家畜の移動は，3時間くらいで終わるらしい。牧民自身はウマで移動する。

1991年に現在住んでいる泥作りの固定家屋（幅10mくらい，3部屋）を建てた。それ以前は，ゲル住まいだった。現在，大きいほうのゲル（元々は居住用）⁽⁵⁾は客人用，小さいほうのゲル（元々はオトル用）は傭人の住居として利用されている。また，固定家屋の前にある家畜囲いも1991年に建てた。運転手のB氏によれば，こうした固定建築物を作るのは，主にシリンホト市街地居住の漢族。彼らは，シリンホトでは仕事がないのだという。

家畜，放牧：

小家畜（ヒツジ・ヤギ）700頭，大家畜（ウシ）50頭。他にウマが少しいるが，「アハドゥー」（親しい友人）の世帯に預けてある。なお，この辺では，近くの場所であればウマで行くらしいが，現在，ウマを飼育する人は少なくなったという。また，筆者の観察では，U氏自身，馬群を追うのにバイクを使用し

ていた。

このソムでは、家畜700頭程度では「中程度」で、年収が3～4万元になる。最も多くの家畜を有するのはヤダムという人物で、2000頭だという。販売価格は、以前家畜の買付・運搬転売業を経験している運転手のB氏によれば⁽⁶⁾、ヒツジ（3歳）は300元くらい、ウシは1000元くらいであるという。また、本来、ヒツジの売却シーズンは秋であったのが、現在は何時でもヒツジを売る人がいるらしい。なおU氏によれば、家畜の頭数が多いために、この近辺には複数世帯が構成するホットアイルは存在しないとのことであった。

傭人（ホニチン）は、このホットへ来てから半年少々経つ。バーリンの出身。旧正月頃から雇っていて、1年契約で月300元の報酬を支払っている。彼らを雇う以前は、U氏達が自分で放牧していたが、U氏いわく、子供も全員出ているし、本人も体があまり調子よくないから仕方ない。彼らは、ゲルはおろか、家畜も持たずにやってきた。子供は、上は12歳くらいの女の子から3人いるが、学校には行かせていないという。

U氏によると、もし、餌を全て飼い葉（テジェール）にしたら年収5万元に達することが可能らしいが、牧地に生えている草（ベルチェール）では無理だという。

その他：

娘は今年、内蒙古師範大学を卒業したが、仕事がないので家にいる。ただし、調査時点ではシリンホットへ行っていて不在だった。息子は中等専門学校卒業後、シリンホットの自動車関係の学校で勉強しているため不在。

ホットの西南西1～2キロ向こうに、木が生えている場所がある。そこには人民公社時代、生産大隊の畑があって、かぶ（マンジン）を植えていたという。

U氏は、草地の後退を非常に気にしており、5年後はどうなるか分からない、と述べていた。固定家屋の北東200mくらいに有刺鉄線による囲い込まれた牧地があり、U氏の説明によれば2000ムーの広さで、草を守るために囲いこんでいるという。実際、囲いの中は周囲（10cm以下）に比べて、明らかに草丈が高かった（30cm弱）。また、U氏に見せてもらった1970年代の写真では、草が膝

丈まで生えており、当時は現在より草の状態が良かったことが伺える。対照的に、現在、夜間にヒツジやウシを休ませている場所には、ほとんど草生がない。

アラシャンボラグ＝ソムは、元々アバガ旗と旧西ホチト旗の土地よりなるが、調査地域は旧西ホチト旗に属していたという。ただし、U氏の家は元々アバガで、現在のジャルガラント＝ソムに居住していたが、1942年こちらへ来たという。U氏によれば、一口に南モンゴルといっても、文化的には大分バリエーションがあるという。例えば、茶の飲み方を取り上げて、東スニトでは、茶に塩を入れないが、西ウジュムチンでは入れる。なお、この家のも全く塩が入っていないが、これは主人の健康上の問題らしい。また、このホニチンは塩入りのハルツァイ（乳を入れず、単に轉茶を煮出したもの）を飲むらしい。大板（バーリン右翼旗の中心地）の漢族と全く同じ風習だという。

U氏は、元々のモンゴル人の食生活は朝・昼ともに茶で、夕方のみ食事（ホール）だったのだが、現在は風習が変わったという認識を示している。実際、このホトで調査を行った2日間とも、昼食に野菜炒めと白米を食べていた。野菜は、筆者の観察する限り、ソム中心地で購入可能。筆者の実見した露天商（トラックで商品を持ってくる）では、キャベツ、チンゲン菜、かぼちゃ、にんにく、ピーマン、なす、にんじん、ジャガイモ、りんご、ネギ、大根を売っていた。

C. 事例3

調査地点：東スニト旗チャントシル＝ソム，ダルハンシレー＝ガチャ（シリングル盟から西へ160km）

ホトの建物構成：固定家屋（レンガ1，泥1），家畜囲い（泥造りの居住スペース有り）

ホトの世帯数：2

世帯1の構成：H氏（31歳），妻，娘（9歳），妻の母，妻の弟

世帯2の構成：S氏（60代後半？）⁽⁷⁾

来歴，牧地の分配，住居：

S氏は漢族で、ウランチャブ盟集寧市の出身。30年前に現地へ移住してきた。S氏の妻は3キロ離れたソム中心地に住んでおり、S氏はソム中心地とこのホトを往復して生活している。牧地はS氏に対して、1991年に分配されたもの。面積は6200ムーで、固定家屋から北西方向に広がる一塊の土地である。牧地内部に私有の井戸がある。

H氏はもともとホルチンの出身で、入婿という形で結婚して10年くらい経つ。東スニト、つまりこのホトへ移住してきたのは1996年。それまでは妻の出身地であるチャハル正鑲白旗に住んでいた。ただし、日本の母子手帳に相当すると思われる書類を見る限り、娘の出生地は東ウジュムチン旗となっており、妻の母も東ウジュムチン旗には彼女の親戚が住んでいると語っていたので、複雑な移住過程を経ていることが想像される。なお、このホトへはS氏の傭人として来住した。

H氏が1996年に来住した際は、S氏は泥造りの家畜囲いに併設された居住スペース、H氏は泥造りの固定家屋（ゲルの形状をしている）に居住していた。1997年春にレンガ造りの固定家屋を建築。これは一棟であるが、内部は完全に二分されており、東側1/3程度がS氏の住居（1組44号）で内部は未見、西側2/3程度がH氏の住居（1組45号）で内部は台所を含めて5部屋を擁する。なお、新しい固定家屋の建築は、H氏のイニシアチブによる。

H氏によると、彼らはチャハルにも土地があったが、3年間不在にしていると土地を没収されるという規定があるため、現在はチャハルの土地は失っているという。なお、現在のホトの土地に関しては、H氏はS氏より「貰った」。その理由は「S氏には労働力がいなかったため」と語っていた。

H氏によると、このホトより西は漢族ばかりが住んでいる地域であるという。なお、景観上は西方も東方も同様な草原である。

家畜、放牧：

S氏の家畜は、彼のメモによると7月11日現在、ヒツジ147頭、ヤギ37頭。H氏の家畜は、本人談によれば小家畜150頭、大家畜30頭とのこと。そのほかに東スニト旗科学委員会の家畜を預託されており、その数は6月16日現在、ヒツ

ジ120頭、ヤギ143頭である（表を参照）。なお、H氏は来住時にチャハルで放牧していた家畜を連れてきたが、家畜小屋や囲いの必要な「新疆羊」（改良種）ばかりだったので、仔畜が生まれなかったという。また、現在は、ヤギのほうがヒツジより多い。放牧については、全ての群れを一緒にしてH氏が放牧している。放牧には、自転車やバイクを利用していた。

現在、家畜囲いは泥造りの部分と、その東側に接する石造りの増築部分よりなる。増築部分は1998年に造ったもので、こちらはH氏の囲い、以前よりある泥造りの囲いはS氏のものであるという。

特筆すべき点として、このホトでは、通常漢族の家畜と見なされているロバ1頭と鶏2羽も飼われていた。また、ヒツジの所有者表示のマーキングとしては旧来の耳印ではなく、青色のペンキが用いられていた。

調査日の翌日、H氏はヤギを売却予定であると語っていた。旗中心地で売却し、代わりに穀物（ボダー：恐らくは白米）を買ってくる、とのことである。その他：

H氏の妻の母によれば、彼らが以前住んでいたのは新しく集通鉄道が開通した沿線であるというが、その一帯は特に生活が困難である、とのことであった。彼女もチャハルの人であり、彼女はスニト人に対する感想として、「朝も昼も茶で、夜は麺類だけ食べる。あんな茶ばかりの生活、私達にはできないわ。ヒツジ700頭、ウシ100頭、ウマはおろかラクダも数頭持っているような人たちが、何であんな生活をしているんだか…」と語っていた。

なお、H氏の食生活は、搾乳を行い乳製品も作る一方、花巻、野菜炒め、卵焼きといった、華北一帯の漢族と共通する料理が数多く作られていた。なお、こうした食生活は、運転手のB氏によればシリンホト市など都市部に住むモンゴル族にも共通するものである、とのことであり、彼に言わせても牧民の食事は「ヤマル チ ノゴー バイフグイ（何もおかづがない）」という評価であった。

